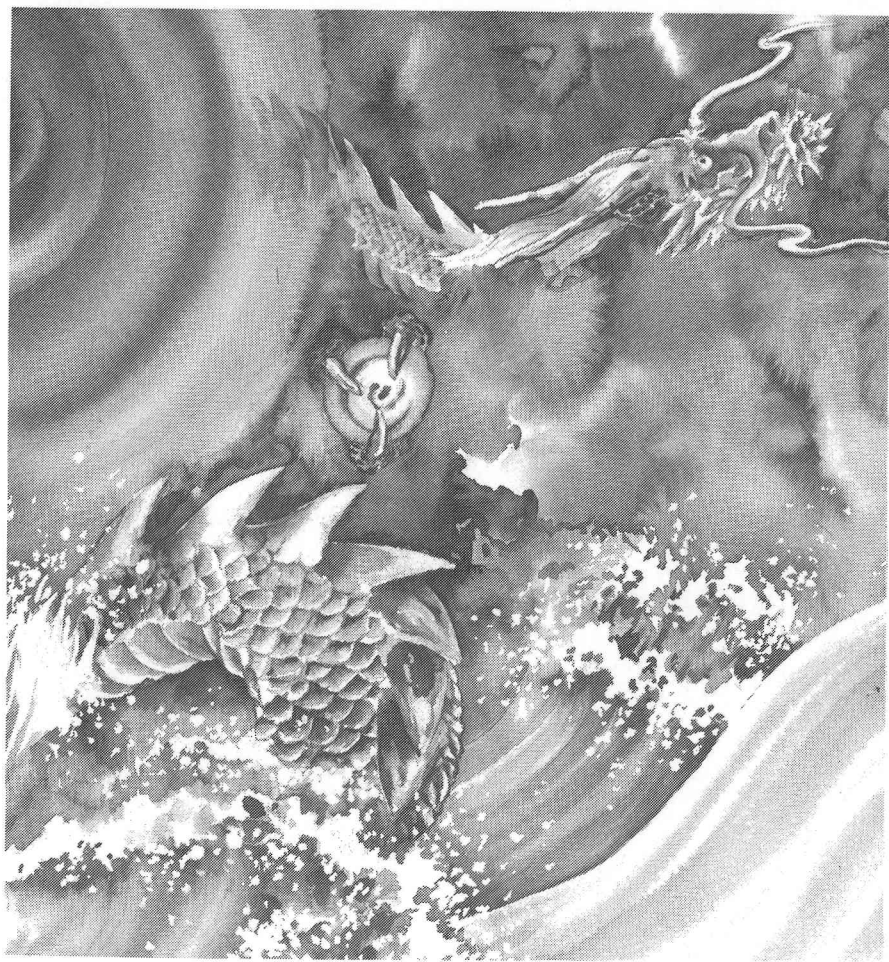


季刊 連句 第22号

昭和六十三年九月一日発行



志の人・故瓢左先生（南柏雑記 20）	1
句の作り方	三好龍肝 2
『冬の日』の難句 — 越の独活苺	佐藤廣幸 4
「鶯の羽も」の巻 鑑賞（I）	東 明雅 8
沙羅の会 歌仙三巻 捌 杉江杉亭・中島啓世・東 明雅	10
（余興二十韻 二巻）	
連句季寄せアンケート	小林しげと・馬場彬風・氏原正雄 杉江杉亭・式田和子・福井隆秀 14
「蓑虫」付勝練習二十韻	18
第二十六回 猫蓑会 歌仙六巻	
	捌 桜井天留子・中田あかり・中島啓世 豊田好敏・杉江杉亭・秋元正江 20
興流連句会 歌仙 ほととぎす	（膝送り） 24
四宮連句会 歌仙二巻 鮎の腸・青梅雨	（膝送り）
連句懇話会全国大会 歌仙 涼しさの	捌 原田千町 26
柏連句会 歌仙二巻	捌 東 明雅・下鉢清子
俳諧連歌 歌仙 朴散華	捌 東 明雅 28
雁帛往来・連句会案内	29

# 志の人・故瓢左先生

南 柏 雜 記 20

雅

連句界の耆宿であつた清水瓢左先生が五月二十五日逝去された。享年九十歳。

信州松本から出ている俳誌「龍胆」の一四一号（昭和四十五年六月発行）に、瓢左先生の筆になる「根津芦丈先生三回忌」の一文がある。それを読み返すと、瓢左先生がその亡き師を憶われる情の篤さと、連句の将来を思われる熱情とに胸を打たれる。この二つは瓢左先生九十年の生涯を貫く憶いであり、生甲斐でもあつたのだ。

芦丈師が昭和四十三年二月歿られるや、瓢左先生は中心となつて俳諧葬を執行され、四十五年四月には私たちと共催で、三回忌を松本で営まれ、「芋日記」という追善集を刊行された。五年忌には追善集「此の一年」を独力で刊行され、同五十年の七回忌は松代で、小山松三・小林光雨・湯本牧人の各氏、私も加えて芦丈句碑を建立され、ついで五十五年の十三回忌を相州片瀬の龍口寺で修され、翌年追善集「踏青余韻」を出版された。さらに五十九年の十七回忌は、宮脇昌三氏とともに施主となり、東京神楽坂真清浄寺で追善会を執行された。

瓢左先生は昭和十三年に入門されたから、師弟の関係を結んで三十年の深い契りとは言え、このように師を尚び、師を慕い、没後の追善供養を立派に果たしたものはない。近頃稀なる美談である。

そして、この師を憶う瓢左先生の胸中には、いつも連句の前途を憂い、発展を願う気持がみちていた。先に述べた「根津芦丈先生三回忌」の文章中、昭和の俳諧評論家として随一の誉のあつた故天野雨山を、その病中に訪われ、その時の雨山の言として、「芦丈先生は蕉風俳諧最後の一人で、この人の生命の終る時、蕉風俳諧はこの世から消えてなくなる。あれだけの人は再度出現しないであらう。然し、先生はお達者であるから、その御健在中先生の薰陶により斯道を会得する人が現われるれば格別であるとの一挿話があつた」と述べられ、最後に、「先生の葬送より今日まで蕉風最後の人に対する禮を尽した。然し、先生が蕉風最後の人ならば、先生は蕉風を滅した罪人となり、門人はこれがかたうどとなる。我々は断じてこれを雲煙過眼視は出来ない。勇往精進、止暇断眠、以て蕉風の存続をはかり、雨山の言を反古たらしむるこそ、先生の靈を安ずる唯一の道なれと痛感した」と、しめくくつておられる。

近ごろ、連句は一応復活したとは言え、まだ隆盛というまでには到っていない。瓢左先生のこの烈々たる志を継いで、「雨山の言」を反古たらしめるよう、つとめたいと思う。

## 句の作り方

### 三 好 龍 肝

この句とは発句、立句または俳句ではなく、連句の付句のことである。現場での私の手段を披露しようといふのが目的である。

連句に限らずどんな道でも秘伝口伝といふものがあり、それは授かるものではなく盗むものだ、と教へられたものである。私は僧侶と連句と二人の師に恵まれたが、両師とも同じことを言っていた。それでも連句の師清水瓢左は折にふれて「これは口伝だ」と言ひ、良師に就かねば連句は上達せぬと広言してゐたものである。

その口伝の一つに「よく離れた」といふ誉めことばがある。これは芦丈先生以前の宗匠たちが使っていた言葉だ」といふのがある。私は不幸にして芦丈にお目通り願ったことはないが、その口癖は「翁の心法」ださうだが、この心法こそが「よく離れた」になるのだと私は理解してゐる。心法とは、前進あるのみにして三句めの転じを心がけよといふことである。翁は制約を超越することはあつても、扉にもならず変化進展を心がけてゐる、と『山樓』に芦丈は説いてゐる。これについては瓢左も「市中の」の草むら……のあたりは植物三句にはならずであつて翁を読む時は、

この様なおとし穴があるのだと警めてくれたものである。余談ながら、このくだりの四句について明雅先生は暁台説を苦しい、こゝで花を出したのがよかつたと本誌16、17号で説いてゐる。

芦丈、瓢左の説即ち芭蕉の心法と心得てゐる私の句作りの基本は三句の転じである。これさへ守れば多少の格外も許され逃がれることが出来る。三句の転じとは「離れる」ことである。

たとえ芭蕉は句ひだ、移りだやれ響きだと説いたところでも、それを一つ一つ現場で忠実に、前後左右を見渡して完全に翁の心法通りの句が吐けるか、となれば先づは無理であらうことは先刻承知の介である。

連句の座というものは静寂であると共に談笑の場でもある。とても翁の心法に気を配る余裕はないし、前句に對する応酬にヨロヨロするだけのものである。その一例を次に。

孫二人雛のあられをわかちあひ

鳴音も高き籠の鶯

と新味はないがまづは無難に受けたのだが、



観音の裏の置屋の花明り

と浅草の花街を持ってきた。これでは雛飾りも鶯の籠も置屋でのこととなり、場面は逆である。芦左両師はこの処を「門があつて家がある。家があつて門があるのではない」と常に教へてゐた。つまり順序を正せといふ訳である。これを避けるには「三句の転じ」を守ればいいのである。

観音の裏の花街も花明り

なれば其場か其時節と転ずることができる。さらに次は、  
ちびた駒下駄響く足音

と訳の分らぬ句がついた。鶯の鳴音の打越に響く足音と御丁寧にも「鳴り物」を連続させてゐる。三句の眺めの教を守ればこんな愚句を吐かなかつたらうにと……。

ちびた駒下駄響く足音

なれば音も避けられ、花街の雰囲気も少しは出てゐる。ここに挙げた例に見られる様なベタ付が主流との傾向が見られるのは嘆かましい。乍失礼、サンプルに採つたのは某巻の一部だが、作者達のこれからの精進を望みたい。

三句の転じが、一卷進行にどれほど大切なことかは、この二句の例でわかつてもらへたものと思ふ。三句の転じが成功、いやスムーズに進んだ例を挙げてみよう。

夏来れば河童が馬をさらふ

見事な句である。馬をさらふ、で緊張感がみなぎり、民話と現場が一致してゐる。

竹垣の下蚯蚓の字

と其場をあっさりと付けてゐる。次は花の座である。前句

までは自自現場と続き、こゝは人情のある、つまり起情の句がほしいところである。しかし、花ともなれば安易な句は考へものである。

長安の花見る事が願ひなり

長安の花とひきしまつた語を句頭に置いたあたりは作者の力であらう。前句の、或ひは打越の場に近いやうであるがら全く離れた、いはば長安といふ俤で前二句をかはしてゐる。このような句作りが「よく離れた」と言ふのではなからうか。また、こんな例もある。

小町の恋を伝へたる井戸

藍染の質屋の暖簾のはたはたと

と其場のベタ付に

アルコホールの切れし鬱病

アルコホールと小町とどこに糸がつながるだらう。これも完全に離れてゐる。

句の作り様には『寂葉』など多くの参考書がある。しかし、どれも結局は「三句の転じ」であり「よく離れた」に落着いてゐる。句作りと言っても特別な秘伝口伝がある訳ではなく、この芦丈、瓢左等の言ふ芭蕉の心法を守ること

に尽きるのである。

私が、現場で心がけてゐる一端を披露したが、要は、十卷一ト稽古、百巻でやや眼が開けると言はれるやうに、ひたすら連句になつむことである。

『冬の日』の難句——越の独活苺

佐藤 廣 幸

『冬の日』には、怪奇、幻想味に溢れた句がかなりあり、それが鑑賞者を浪漫の世界に誘う反面、近寄りにくい障壁ともなっている。蕉風は談林や虚栗の過渡期を経て、ようやく熟成してくるが、『冬の日』の中には、まだ過去の残滓を色濃く残した、狷介、奇抜を好む気風が横溢している。それが鑑賞者の理解をさまざまに大きな要因となっている。『冬の日』五歌仙の一つ、「はつ雪の巻」の名残の裏の次の一連は、右の意味で最も『冬の日』らしい難解な特色を備えている。

杖より硯をひらき山かげに

芭蕉

ひとりは典侍の局か内侍か

杜國

三ヶの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ

重五

しらかみいさむ越の独活苺

荷兮

先学の説を吟味しながら、私なりにこの一連の解説を試みようと思う。先ず杜國の付句から始めよう。向うの山かげに見える人影は誰であろうか。よく目をこらして見ると、ひとりは典侍の局か、それとも内侍か。と見定めようとす

る句である。これは『平家物語』の中でも最も有名な「大原御幸」の面影付であることは、俳諧を志すほどの者なら誰もが容易に推測がつく筈の付けである。そういう意味ではこの付句は決して難解な句とは云えない。典侍の局は平重衡の北の方、内侍は信西の娘で、阿波の内侍とも呼ばれ、共に壇の浦で滅亡した平家一門の菩提を弔うため、洛北の大原の寂光院に隠棲した建礼門院（清盛の娘・安徳帝の生母）に仕える上臈である。

重五の付句は、この杜國の前句の上臈から連想が、王朝華やかな宮中の女官達の見守る三月三日の鶏合せに飛んだのであるうか。或はまた、重五は杜國の前句を相撲風の呼び出しの名と見て、片や典侍の局、片や某の内侍という女性らしい呼び名から、それにふさわしい古社の神事の鶏合せと見立てて付けたものとも見られる。何れの場合も、単なる鶏合せを付けたのでは曲がないので、相対する鳥として、鸚鵡と尾長という珍鳥を登場させて前句に応じた。俳諧はこうした虚構を楽しむ文芸でもあった。後者の立場からする、重五の付句の解釈では、和歌森太郎氏が注目すべき新説を出している（芭蕉の本5、『歌仙の世界』所収「生

活の俳諧)。この新説に従えば、この付句の鶏合せは宮廷行事ではなく、尾張の津島神社に伝わる旧三月三日の『冬の日』の地元の津島神社鶏合せのパロディーであるという。尾張の連衆には親しい津島神社の神事を背景にした句という解釈である。私は宮中鶏合せ説よりも寧ろこの古社の神事説に惹かれる。鶏合せを神事として伝承する神社は尾張の津島神社のみならず、今日でも和歌山などに残っている。そうした古い伝承があることからこの新説は無視できない。

このあたりまでは、どうか各作者の意図も分かるし、付筋の糸もたぐれるが、荷兮の挙句となると、前句にどう応じたのか、また一句自体何を意味するのか全く五里霧中をゆくようで、戸惑いを隠し得ない。古註、新註を問わず、この挙句には手古摺っている。

先ず、古註の代表として、何丸や暁台も引用する鶯笠説を紹介しておこう。鶯笠によれば、むかし羽越地方に白髪明神と独活刈明神の二神がいて、互に仲が悪く、この二神が争えば天候は荒れ、その地方の作物は不作となった。白髪の神は独活が好きで、独活刈の神はこれを知り、独活を白髪の神に献じた。白髪の神はこれを喜び、静かな日が続いた。この伝承から三月三日を祭日として、その地方の人々は白髪の神の社前に独活を供えた。これを怠った年は、天候が荒れ、作物はとれなかった。これが越の独活刈の神事のいわれであるという。

この荷兮の句も、この神事に基き、白髪明神が勇ましく

独活刈明神の軍に立ち向うところをいったのだと解し、前句の「鳥いくさ」に対し、「神いくさ」を付けたのだと説く。如何に辺境の地の神々の話とはいえ、神の名も、そのいくさの話も少し出来すぎていて、不自然さをぬぐいえない。鶯笠説は細部にも不審な点が多く、頭から信用することはできない。

この鶯笠説に対して、『冬の日註解』の升六説の方が比較的穩当に見える。升六は、

爰には禁裏に其國々の産物を貢奉る体を附たり。越の独活刈は貢ギ越スの熟語なるべし。是挙句なれば祝言になして聖代のさまを附たり。しらかみいさむとは白髪の老翁も悦びて貢を奉るとなるべし。万民聖徳に懷きたるいと目出たき御代なりといふべし。

と説く。新註では、この升六説に依ったのが幸田露伴説である。露伴は升六の貢進説を補強するため、『延喜式』の記事を援用し、独活に関する和漢の本草学の知識を引用し、自説のガードを堅めている。荷兮がいくら故事好きといえ、延喜式や本草学の知識によりこの付句を創ったと見ることは到底できない。露伴学人の評釈は、自己の学識に溺れた独り角力としか言いようがない。私は寧ろ、鶯笠説の中にこの句を説明する手掛りがかくされているのではあるまいかと思う。というのは、荷兮が前句を古い神事の鶏合せと見て、それに対応する虚構の神事を付けて前句に応

じたと見られるからである。その意味で、私は升六説よりも鶯笠説の方に惹かれるものを感じる。

日本民俗学の創始者、柳田國男翁は夙くから、この句を下関の和布刈の神事から想を得たのではないかという卓見を抱かれていた。柳田翁のこの考えは、中山太郎氏の「独活刈の神事」という論考（昭和五年、大岡山書店刊『日本民俗学』神事篇所収）の中に、はっきり記されている。中山氏が「K先生の考説」として右論考の中で紹介するのが、柳田翁のこの句に対する考えである。中山氏のこの本は、現在では知る人も少なく、見るのも困難な本になっているので、その条を左記に紹介しておく。

K先生の考説。私（中山太郎氏）は先日K先生（柳田國男先生）を訪ねて、この句に就いて高見を伺ったところ大略左の如く語られた。全体、連句の面白味といふものは、付合つてゐる者同士の間に限られたもので、他人が読んだり解釈したりしたところで、到底作句者自身達が味ふだけの興趣が湧くものではない。従つて連句には、其の場限りの趣向や、其の人々だけの思ひ付きなどが旺んに用ゐられるものである。そしてかゝる例證は芭蕉の七部集だけを見ても随處に指摘することが出来るのである。此の立場から見ても、越の独活刈といふ神事の如きは荷兮の創作と認むべきものであつて、それを何丸の如く、吹浦の云々と考證するに至つては、その迂濶さに驚かされるのであつて、独活刈の神事を行ふ神社があるなどと

いふことこそ実に眉唾ものである。誰も知つてゐる下関の和布刈の神事——正月元朝に生えてゐる和布を、神官が松明を振りながら刈るといふ、神秘的な伝説は、荷兮等俳人の好奇心をそそるに充分なものであつたに相違ない。既に和布刈神事がある。それを独活刈ともぢつて見るのも一趣向だぐらゐるところで、創作したに過ぎぬのである。それ故に、奥州にも、越後にも、更に越中にも、越前にも独活刈の神事が行はれたといふ話も聞かなければ、記録も見ぬではないか。これらは幾ら詮索しても、そんな神事は永久に発見されぬことと思ふ。

驚くほどの洞察力と自信にみちた発言である。柳田翁は別のところで、この荷兮の挙句について、次のような見解を書きのこしている。併せて読めば柳田翁のこの句についての考えは明白である。

今でも何かにそういう事実（鶯笠説を指す）があるという者があるが、私にはまったくの作り事としか思われない。……爺の独活刈なども原因は是とよく似てゐる。一方に弥生の節供の鶏合せのかわりに、鸚鵡を出されたというような思ひ切つた趣向ができる、是に立向うためにはどうしてもまた一段と頓狂な空想が浮んで来ずにはおられなかつた（『木綿以前の事』所収「山伏と鳥流し」）。

柳田翁は露伴説に敢て異を唱えることをいさぎよしとせず、避けて通られているが、その主張するところは明確にされている。この柳田説とは別の角度から、故伊藤正雄先生もこの荷今の挙句を門司の早鞆明神の和布刈の神事のパロディーと受け取り次の様な解釈を下している。

前句の如き鸚鵡尾ながの鳥いくさも、花の都あたりには実在するものと仮定し、同じころ北陸地方では、独活刈の神事といふ独自の行事が催されるものと想像した対付けであらう。けだし九州門司の早鞆明神には、古来有名な和布刈の神事があり、大晦日の夜、神官が早鞆の瀬戸（関門海峡）の和布を刈取り、元旦神に供へる。この神事がすむまでは、付近の漁民は和布を採らぬ習慣になつてゐる。そこでこの海辺の和布刈の神事と対照的に、越路の山国らしい独活刈の神事なるものを想定し、春光漸く北地にも遍き折柄、寒さに弱い老人たちも勇み立つて、この神事にいそしむ体を付けたのであらう。（『芭蕉連句全解』昭和五十一年刊）

右の様に伊藤説が、越の独活刈を古い伝統に基づく和布刈の神事のパロディーであるという、柳田説と同一の結論に到達したことは一見不思議に思われるが、私の見るところでは、伊藤説が柳田説を予め承知してこれに同調したものととは思われず、伊藤説は独自の調査によって導き出された、全くの偶然の一致だと思われる。尤も生前の伊藤

先生を存じ上げている私は、先生が迷うことなくこの句を、早鞆明神の和布刈の神事のパロディーと見抜かれたのは、戦前の神道の総本山ともいうべき伊勢の神宮皇学館が敗戦により解体されるまで勤務されたキャリヤーにもよるが、また、和布刈の神事が謡曲『和布刈』によってもよく知られた伝統あるユニークな神事であったことにもよるので、その一致は何ら不思議なこととは思われない。

この荷今の挙句を和布刈の神事のパロディーと解すると、前句を尾張の津島神社の鶏合せの神事のパロディーとする和歌森太郎説が俄然注目されてくる。即ち前句の珍鳥によるフィクションの鶏合せの神事に対し、これもまた、フィクションの越の独活刈の神事で対応したことになるからである。尚、「和布刈神事」についての詳しい解説は五来重氏の論考に譲りたいが、私はこの解説を読んで、和布刈神事をパロディー化した、荷今の「越の独活刈」の句が挙句にふさわしい祝意を含んだ句であることがようやく理解できるような気持ちになった。

和布を神聖視するのは、海岸にながれ寄る海藻は「常世」から寄り来る霊のこもれるものであり、したがって海神の宮からの贈物とする古代信仰があつて、和布刈神事になったものと推定される。（『続仏教と民俗』所収「年中行事と民俗」昭和五十四年刊角川選書）

特にこの五来氏の一節が私の印象に強く残っている。

# 「鶯の羽も」の巻 鑑賞 (I)

東 明 雅

猿蓑の四歌仙のうち、「市中は」の巻の鑑賞が前号で終わったので、今回からは同じ猿蓑の一卷「鶯の羽も」の巻を鑑賞してみたい。

この巻は芭蕉と去来・凡兆の三人に史邦ふしはなを加えての四吟歌仙である。史邦は中村氏。尾張犬山の藩医であったが、貞享のころ致仕して上洛、芭蕉やその弟子たちと親しかつた。のち江戸に下り没年不詳。

元禄三年（一六九〇）七月、幻住庵を住みすてた芭蕉は湖南・京都で生活し、九月二十八日伊賀に帰った。しかし、年末にはまた京へ戻り、翌四年の春は再び湖南で迎えている。だから、本歌仙の成立を元禄三年九月二十八日以前とみる説（阿部正美氏・「芭蕉伝記考説」）もあるが、いかがであろう。先に講じた「市中は」の巻より後にできたことは確実であるが、この猿蓑という書が、発句の部巻一の巻頭に「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也 芭蕉」を置き、書名もこれに由来しているので、連句の部巻五でも、初しぐれに因んだこの「鶯の羽も」の巻が巻頭に出されているのである。

鶯の羽もウツロハ刷ぬはつしぐれ

（初冬。初時雨。人情無）

去来

刷は「かいつくろふ」と訓み、「かきつくろふ」の音便であり、「掻き繕ふ」の意である。この語はもともと他動詞であるから、純粹にその点を強調すると「何が何を刷ふ」のか、はっきり説明しなければならない。その点、たとえ「山田孝雄氏ははっきりと、「鶯が羽を刷っている」（続々芭蕉俳諧研究）と解釈され、これと同じような意見の人は多い。山田氏の説は「刷ふ」という語が、和漢朗詠集その他の古典で、鳥の動作をのべる事に用いられる例が多いところにその根拠がある。

これに対して、「はつしぐれ」が鶯の羽を刷ふのだと見る説があり、同じ「続々芭蕉俳諧研究」で小宮豊隆氏が提唱しておられる。即ち、鶯のような佗びや寂びから遠い鳥でも、「はつしぐれ」の為に佗びや寂びが出てくる、その状態を叙したものとする説である。

さらに、「続々芭蕉俳諧研究」の中で岡崎義恵氏は、「羽がおのづから刷はれてゐる、それ自身装ひを整へたといふ自動的な意味に用ゐることは出来ないでしょうか」と発言さ

れた。

この岡崎説を継承して、最も明快に説いたのは杉浦正一郎氏で、「いつもけばだちし鳶の羽が時雨に濡れて美しくおさまれり」の意。羽が主になる故『羽も』と言へり。刷は自動詞。鳶の羽も自らと、のひたりと云。かゝる異法は俳諧には許さる。先注の如く、鳶の嘴にて翼をなでつくるのならば涼待説の如く『鳶も羽を』とあるべし(新注猿蓑)と言っている。

右の諸説、いずれも碩学の説だけに傾聴に値するところが多い。しかし、「刷ふ」という語がどういう行動をさすか具体的に説明しているものはない。これについて、「滑稽雑談」(正徳三年序)巻之八、一七「毛をかふる鷹」の項に、「或鷹匠の物語に、春のすゑより夏に至て、鷹の毛落て後、鳥屋籠の中、油を塗るといふ事待る、鷹の尾筒の上の方に、膏壺とて羽の下に坳あり、此所へ身の膏が満ると也、此膏を己が嘴にて毛の落たるに塗れば、もとのごとく毛を生ずると也。総て外の時にても、はたゞきて羽の毛そゝけたるに、かの膏を嘴にてぬりて、毛を刷ふと也」と出ているのが参考にならう。また同書巻之十二、「鷹羽遣ひをならふ」の項に、「鳥屋人と云、おほくは四月八日也。季夏の頃、羽を刷て物を撃んの気生ずるならし」とあるのも注目すべきである。もちろん、鳶は鷹と違って、鳥屋入(換羽の間、鷹部屋で放し飼すること)もないが、同じワシタカ科の鳥であり、同じように、春に換羽をはじめて秋に終るのである。「滑稽雑談」にいう膏壺をもっているこ

とも同じである。

右のように「刷ふ」という語が、鳥類の特殊な行動であることが分かった以上、やはりそのように解釈すべきではなからうか。

鳶は猛禽類と言っても、人里に近く群れ、また死んだ魚や腐った魚を餌にしている為か、鷲や鷹よりは一段低く評価されている。仮名草子「竹斎」に、主人公竹斎のみずばらしい姿を「綴紙子に紙頭巾とりさがしたる姿にて、さながら、鳶が身ぶるひして風に吹かれし如くなり」と述べているのは、有名な「冬の日」の芭蕉の発句、「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」の典拠であるが、かたがた、この時代、あるいは芭蕉の一座における鳶というものに対する通念をうかがわせるに十分である。その平素はみずばらしい姿をしている鳶も、換羽を全く終って冬に入り、初時雨がさつと通りすぎるころは、高い樹の上で、羽を刷っているその姿も、見違えたように、しみじみと眺められるところであろう。

「付合てびき蔓」(天明六年成)に几董が「発句初しぐれは題にて、鳶は趣向の取あはせ也。扱かいつくろふ羽とせしが句作也」と言っている通り、初時雨という題に対して、和歌や連歌などではあまり取り上げられない鳶を取りあわせ、また、その取りあわせるのに「刷ふ」という言葉を発見し、使ったのがこの句の成功の原因であった。初時雨と鳶とだけでは詩にならない。「刷ふ」という語で鳶が初時雨の余情に適うようになるのである。

沙羅の会

歌仙三卷

昭和六十三年五月十八日  
於 京橋区民館

樟若葉

杉江杉亭 捌

彫り深き碑面の文字や樟若葉

五月の風の吹き抜くる街

ティーテーブル客の支度のととのひて

仕舞ひ忘れしSPレコード

上弦の空を指さす子らの声

初鴨早やも渡りくる湖

遠野路の民話を囲みぬくめ酒

女剣劇座長妖艶

若き日の過ちふっと思ひ出し

双手ひろぐるキリストの像

ポンペイの廃墟の隅に黒き猫

どんとぶつかる掏摸に謝る

寒の月身すぎ世すぎの曳き屋台

頬被りして今日も定刻

減税はお題目だけ勤め人

様変りするパートタイマー

車椅子花の大枝押しくぐり

草餅の香の指にはほのかに

春の雷天帝何を叫べるや

アフガン退去恙無からん

隅田川舟の下りは十の橋

稽古三味線洩るる横町

どことなく舌つ足らずの耳年増

プールサイドで見せるハイレグ

「蛸」てふ名のゼリー菓子別れの日

地藏和讃の声が揃はず

和綴本端につきたるめくれ癖

大入道の目玉ぎよろぎよろ

月天心南を指せる機内にて

茸狩りせし過疎のふるさと

葛紅葉先の先まで紅葉せる

増築の宿白き外壁

世渡りと学のあるなし別のこと

下萌踏んで岡にのぼりぬ

小手がざし仰ぎて見やる花の雲

互ひ違ひに蝶々の舞ひ

留	雄	弘	雄	弘	同	町	留	町	雄	哲	町	天留子	弘	子	哲	町	千	正	杉	亭
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-----	---	---	---	---	---	---	---	---



# 桐咲けり

中島啓世 捌

山裾のひと塊<sup>カ</sup>染めて桐咲けり

溪川の奥鮎<sup>ウ</sup>の釣人

ハンモック嬰兒ひそと眠るらん

パウンドケーキふつくらと焼き

月浴びて持ち重りせし稀観本

虫の音しきり庭の叢

烏瓜真赤に熟れしを手渡され

恋してしまふ同母兄妹

アパートの誰も知らない新婚さん

手作り爆弾部屋でこっそり

親善の船の哀れや暁の火事

寒月照らす岩を打つ波

大観も天心も亦朦朧体

雀二三羽餌を撒きやる

朝の作務すみてしづかな方丈に

株買へといふ電話いくたび

花の中パイプオルガン甦り

パンダ転んで今日もうららか

啓世 彬風 淳子 正江 久美子 淳江 美風 淳江 麻江 麻世

春の風邪葛根湯を煎じつつ

職にもつかず耽ける哲学

駄菓子屋のソース煎餅ガラス壺

橋のかかりて島のにぎはふ

はりえんじゅ咲きたる道を犬連れて

浴衣まとひし女と目の合ひ

早業に二分の一秒盗むキス

親子代々掏摸のジプシー

酔ひつぶれ巴里の駅でねむりこけ

修道院の磔冷ゆ

狭き門叩く若者月今宵

購高鳴きて創刊号出す

相続税非課税の分倍増に

オールドラッグザイン流るる

手抜き主婦夕餉は又もてんや物

生返事して煙草ぶかりと

花びらを車につけて信濃路を

土間いっぱいに扇干される

淳美 江風 麻世 淳美 江風 麻世 淳美 江風 麻世



余興二十韻二巻

沙羅の会の歌仙一卷が満尾した後、時間が余ったので、二十韻を興行。「夏つばめ」の巻は三十分で、続いて「葉桜」の巻は二十分で首尾した。連衆の皆様御苦勞様。

夏つばめ

明雅捌

葉桜

明雅捌

橋の名も江戸の名残や夏つばめ

葉桜となる児童公園

賑かに座敷の犬をかまひひて

念入りに淹れ熱きコーヒー

山脈に消えて行くなり月の影

君よ歌へや秋のデュエット

移り香の忘れ扇を胸にさし

すっかり遠くなつた初恋

レーガンのマダムは凝つた占で

コルクの積木孫の残して

枯草の埋める高値の空屋敷

湯豆腐の鍋くつくつと月

婆の縫ふ大振袖の糸しごき

目もときりりと早変わりなり

口吸はれ耳を吸はれて有頂天

コーランかけて乗つた飛行機

地下鉄は落書だらけニューヨーク

交みでは喰ふ鴉かしまし

御神酒に酔ひ痴れてあり花の頃

お玉杓子を子等の土産に

孝子遊

和子遊

和子遊

みづゑ

明雅

和雅

和雅

孝子遊

和雅

孝子遊

和雅

孝子遊

同雅

遊雅

和雅

遊雅

孝子遊

遊雅

遊雅

和子遊

和子遊

みづゑ

和子遊

和子遊

和子遊

孝子遊

孝子遊

同雅

孝子遊

孝子遊

孝子遊

孝子遊

孝子遊

孝子遊

孝子遊

孝子遊

孝子遊

孝子遊

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

明雅捌

葉桜の色濃くなりし遊歩道

輪になって落つ噴水の翳

美術館出て憩ひる人ならん

混ぜ御飯炊く釜の小さく

いとけなき黒き瞳の仰ぐ月

秋の袷の裏を揃へし

年上の人に魅かれてやや寒く

かちりと鳴らす水割の酒

税金はどこをへらしてくれるやら

ちよつとよすぎた父の戒名

調教師髻の割には優しくて

ぽんと放り出す膝の三毛猫

デジタルの音なく過ぐる時惜しみ

風過ぎるいろ町の月

銀流しっぱい男あらはれて

ひもじさに耐え今 No.1

欄干となる試験通りし停年後

紋白蝶の飛んでる徑

早慶のボートが並ぶ花の午后

乗込鮎に綸たる人

## 連句季寄せアンケート

前略

連句を巻く場合、手元になくなくてはならぬものは季寄せ（歳時記）であります。私どもは山本健吉編の季寄せ（文芸春秋社）を愛用しておりますが、それはこの季寄せが春夏秋冬のそれぞれ三月にわたるものと、初・仲・晩の区別をはっきり付けて季語を掲出している為でありまして、俳句と違って連句では、この区別が一番重要だからであります。

しかし、この季寄せは春夏と秋冬の二冊に分かれており、取扱いや不便であるとともに、内容的にもいろいろ問題がないわけではありません。

それで、私どもは新しくして便利な連句の季寄せを作ろうと考えております。

皆様におかれましては従来の季寄せに対する御感想なり、新しいものに対する御希望なりを卒直にお聞かせいただき、私どものこれからの作業に対する示唆を与えてい

ただければ甚だ幸いと存ずる次第でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

六月十五日

東 明 雅

各位様

### ◆分身の条件

小林しげと

歳時記は例えば適宜な季語を拾いたい、既に月次の月等が出たため定座で月の異名を知りたい、付合いの季語が逆戻りしないように付句の季語を按配したい等々のため不可欠です。また盛夏に極寒の句を作るとき実感が湧かず困惑することがままあります。前句に付き難くて工夫の糸が纏れ落着かないときでも頼りになるのが歳時記です。俳句歳時記を利用していた連句作者は早く

から連句歳時記を待望しておりました。前年『連句歳時記』が出て好評を博しましたが、それとは別に新しい連句歳時記がもし編まれるならば凡そ次のような考慮が払われたら幸甚です。

一、体裁 携帯の軽便性（新書版サイズの季寄せ式）表紙は堅牢、活字は8乃至9ポイント程度。インディアン紙使用。

二、代価 学生、主婦、高令者にも入手し易いように廉価であること。

三、内容

(一) 季語 三（春・夏・秋・冬）及び初・仲・晩を区別する。

歌仙一卷を例示し参考に供する。

(二) 項目 現行俳句歳時記同様に時候・天文・地理・生活・行事・動植物等进行分类し実用の便を図る。

(三) その他 夏秋冬の正花、恋、観想等の詞の一覧の作成。

(四) 用例 古今（元禄期・中興期・明

治大正昭和)の作例を撰択、また三句転を見渡せるようにする。

(四) 記述 平易簡明のこと。

(六) 索引 季題別・五十音順の索引を付す。

四、附録 俳句とは異った視点で連句歳時記の特徴、用法について解説を行う。

使つて便利、読んで楽しい歳時記、連句はこれ一冊で十分という歳時記こそ連句実作者の分身の条件ではないでしょうか。

### ◆新連句季寄せに就いて

馬場彬風

待望のこと愈々御着手の由大慶至極に存じます。さて「希望を申せ」との有難き御意。然し「現在の季寄せは俳句の為のもの」連句作者なら誰でも感じている「不便さ」と問題点。

私見として更に申し添うべき事があるうかとは存じますが、既に満四年近く、四十巻を巻いた興流連句会の連衆の意見も集約し、左記いたしました。ご参考になれば幸いです。

(一)従来を季を四つに分類している分け方はそのままでもよいかと存じますが、例えば

三春はよいとして初春から仲春に通ずる季語、仲春のみの季語、仲春から晩春へ、又晩春のみの季語があります。例えば人事で卒業、入社等、植物、動物等にも多々あります。此等をヘディングの下にでも註記できないでしょうか。

季戻りにならずに自然に続ける為です。

(二)見做しの季語。これは実作上季移り等に便利で大切なものと存じますが、例えば水盤(夏)開帳(春)等或は整理すべきものもあるかと存じます。

(三)新旧暦による季語の混乱。新年(冬)はよいとして盆、鬼灯市、七夕祭、朝顔市等は、現実には夏行う所が多い。季は秋として新暦の場合は夏の季語を添えたらよいでしょうか。新年でも「明けの春」「迎春」「新春」等は付句に冬を付けるのは稍々抵抗がある。新年の句二句の次に「明けの春」等出た場合、春の句と見なして次は二句春の句を続ければよいか等、この辺り何か取り決めが出来ないかと。

(四)冬の発句に新年の脇を付けるのは穩当でないと思う方もありましよう。

右の(三)(四)の問題等は付録として別に「新旧暦に関する季語の取扱ひ方」としてお決

め下さればと存じます。

又この機会に是非「現代正花論」をお定め下さい。中華が正花か豪華が正花か、等々です。ご指定の字数も尽きました。昭和連句の為に遺す偉業、ご成功を祈念します。

### ◆三つの提言

氏原正雄

連句専用の季寄せを作られるとのこと、私達にとつてこれ以上の喜びはございません。意見として申上るほどのものはございませんが、気のつきました二三申述べさせていただきます。

(一)実作に於て、この季題がどの季で、且つ三、初、仲、晩のどれなのか、索引だけで判れば大変便利です。今の歳時記では、季題によつて頁を繰り、やつとそれが判るので、早く知りたい時はまたるくとなりません。

(二)使用の為にも、又持ち運びの為にも、歳時記は一冊であり、且つ出来るだけ小型であつて欲しいものです。その為には二段組にするとか工夫があると存じます。それには角川の合本俳句歳時記は一つの参考になるかと思ひます。

(三)季題の取捨選択とどの季に属するかの決定には問題もあります、やはり現代を尊重して、余り古いものは捨て、新しいものは取上げては如何。どの季に属するかは東京中心にお考え願いたいと存じます。

## ◆座右の書

杉江杉亭

今般連句用季寄せ発刊のご計画を承り、まことに時宜を得たものとして賛意を表します。先に「連句辞典」を発行され、今回「連句季寄せ」の発行となれば連句実作者にとって座右の書としてこの上なく格好のものと考えます。

さて、新しい連句季寄せについて左記に私見を申し述べます。

一、表題は連句季寄せとする。

季語の解説に主眼を置いた歳時記方式ではなく、季語の解説は必要最少限にとどめた季寄せとする。

二、例句は季語を中心に打越句、前句、付句と三句並列にする。この点が従来の

俳句歳時記、季寄せと異なり特色のある点で、付け味と転じの変化を季語によって味得出来るようにする。

三、巻末索引には季語の下に( )で例えば三春、初春、仲春、晩春の別を明示する。この点も従来の季寄せにはない特色で、実作者の便宜を考慮したものである。

四、巻末に歌仙、二十韻等の構成表を付す。

五、巻末に事物の題材例を付す。

六、巻末に付方自他伝を付す。

七、季寄せは全一冊の袖珍本とする。

以上、縷縷私見を申し述べましたが、今回発行ご予定の「連句季寄せ」が連句実作者にとって、常時必携の書となることをお祈りして止みません。

## ◆季寄せの体と用

式田和子

季寄せを考える場合、連歌式にいえば「体

と用」に分けられると思う。

体。季寄せ本体を考える場合、現在使用している山本健吉編のは、春95P、夏158P、秋112P、冬142P(歳末新年を含む)であるが、連句では一巻の中に春秋のほうが夏冬より句数が多いのでこの割合は反対のが欲しい。

角川文庫「俳句歳時記」の総索引は便利だが、季を初仲晩に分けていないので、全部の季語が頭に入っていない私などは、それを更に山本健吉本に当らなければならぬという不便がある。水原秋桜子編(大泉書店)の「現代俳句歳時記」はこの分類があるが、春は早春、開春、晩春。夏は初夏、盛夏、晩夏というように用語を統一していないのは手引き書としての機能にはひっかかる。手引き書という用語があるが読物としての歳時記が多く出版されている現在、読み物と手引き書との機能の分別は必要で、連句用手引き書なら例句は不必要。その分コンパクトにできよう。

用。手引き書として使う場合、語数が多いことが望まれる。例えば鷹、さしば、が季寄せに入っていないと、浅学な私などは若干の疑義を持ちつつ付句を治定することになり、俳句練達の連衆に対して失礼か

なと思うことがあるからだ。最もこれは私個人の未熟さのためだがもうひとつ、例句は不要だが季語の説明は必要で、これがないと連衆に説明する根拠に困るからである。体用を括っての問題点は季語が旧暦によるため現実とずれることだろう。しかし、これは俳句の根元的な問題だから、連句だけは違うということは難かしいと思われる。植物などで季節感が失われているものは、季を動かすより「季無し」として扱うようになるだろうが、これも漸次一般化されてから、というのが穩当ではないだろうか。

## ◇季語寸感

福井隆秀

戦前、俳句をやっていた少年時代、三省堂発行の虚子編「改訂新歳時記」（昭和九年初版）を使っていました。

一月から月別に季語が出ていて、花は四月、藤は五月、牡丹は六月、菊は十月と盛り

たりでは三月末頃から咲くでしょうし、逆に東北の弘前や北海道では四月末から五月にも咲きましょう。しかし、いままで春の季語はこれこれ、秋は何々と同季のなかでの推移も考えずに使ってきました。ところが六十近くなって連句を学んでみると、春の句なら何を出してもよいかというところはゆきません。晩春のあとに初春を詠むと季戻りで式目にさわります。以来、三春、初春、仲春、晩春の季語を注意するようになりましたが、日本人特有の微妙な季節感覚や美意識が自ら現われていて、興が尽きません。

あるとき、東先生捌きの連句の会に一座して、

二階より見おろす人に花吹雪

明雅

竹下通り四月馬鹿行

文人

と、挙句がついたことがあります。

エブリルフルは、山本健吉編「季寄せ」（文芸春秋刊）では仲春なので、晩春である花のあとでは原則的には出せないところですが、先生はそう違和感がなければ

杓子定規にこだわることはない、と治定されました。花は仲春でもよいのではないのか。かって私は、虚子、四方太、漱石の三吟歌仙の感想を書いたことがあります。

花更けて御室の御所を退るなり 四方太

銘をたまはる琵琶の春寒

漱石

大体春寒は初春に使うもので、花のあとには使えぬ季語だと思います。

私の愛読している荷風の日記、断腸亭日乗には、春先に春寒料峭なる言葉がよく出てきます。ざっと見渡すと、昭和七年では三月十日、八年では二月十九日、十年では三月六日といったところで、この時分にはいかになんでも花は開かないのではないでしょう。四月になって春寒料峭を荷風が使った年は、絶無です。

季語の時候の選定は難しいものですが、こういう点を考慮下さって、連句季寄せをお編みいただければ、われわれ連句人にとって大変有難い歳時記になると、希求しやみません。

# 菘虫

付勝練習二十韻

東 明雅

切 句 投  
日 20 月 10

第三 海岸線波頭真白に月ありて

四句目 飛ぶやうに行くホバークラフト

ウ折立

治定 心太芥子きかせてすすり込み

1 泪とはほほえみを知る修道女

2 ジョッキあげアイン・ツワイでドライ和し

3 うら若く匂へる腕に隣り合ふ

4 刺青にきりり禪夏祭

5 ゆたかなる胸にシャワーのはじかるる

6 カラフルな濯ぎもの干し新所帯

7 娘の恋に重ねて思ふ若き日を

8 マリンバに汗のしたたるコンサート

9 誘ふよに伸びたる脚の夏少女

10 ホットケーキメイプルシロップたんとかけ

11 新婚のカーテン閉ぢて熱き胸

12 伊達者と気取る男の冬帽子

13 カルメンの心魅せられ闘牛士

14 短夜を嘆きて拗ねる彼とゐて

15 リゾートでリッチに決める服選び

千 町

遊

上月  
淳 子

元 子

隆 秀

正 雄

弘 次

妙 子

遊

ますみ

良 子

井田 淳 子

淳 子

千 町

麻 子

杉 亭

天留子

千 雪

淑 子

※きり恋句であるが、おだやかで付味・転じともに悪くない。

4は神祇の句であるが、刺青といい、禪といい、折立にはやはりすこし勢がありすぎる。

5は付味といい、転じといい、申し分がなく、この句を治定してもよい位である。

ただ、やはり恋句の次の句でヤマ場が早くも出来る可能性があるので遠慮した。

6はカラフルが大打越の真白に障るようだ。

7もなるほどと思うものの、この辺で述べたい句を出されると、あとが沈んでしまうおそれがある。

述懐・懐旧の句はもすこしあとの方がよい。

8の句はすばらしい。付味といい、転じといい出色のもので、最初はこの句を治定しようと思った。

しかし、ホバークラフトとコンサートは同じ片仮名であり、ともにトという文字で終る、

その点がどうもまずかった。

9もおもしろくないのだが、夏少女という語がちょっとくるしかった。

外に何かよい言い方はないものだろうか。

10も治定の句と同じ狙いの作品で、ホバークラフトに対して、

ホットケーキ・メイプルシロップで受けた付味もよく分かる。

一巡の方なので遠慮してもらった。

11は転じは上々だが付味が今一歩か。

12はおもしろく、さりげない恋の呼び出しである。

13は前句を受けてはげしい恋をつけたとのことである。

カルメン・闘牛士ともに印象が強く、やはり裏の折立としてはすこしはげ

しすぎるのではなからうか。

14気分を一転しているところはおもしろいが、

打越の月と時分の、また、「て止め」の打越である。

15狙いは分かるけれども、このように表現すると、打越の海岸から前句のホバークラフト、そしてこの付



- 16 金毘羅の石段仲良く登りつめ よしえ  
 17 シドニーに中国系の美少年 哲  
 18 疲れたる足投げ出す四畳半 道郎  
 19 ピストルもハートも捌くあざやかに 澄子  
 20 弾みたる会話のふつと跡きれて 治子  
 21 ファックスに赴任の辞令見つけたり 鋭太郎  
 22 フィアンセ息つまるまで抱きしめし みづゑ

(応募受付順)

二十韻では五句目から裏に入る。裏に入れば、神祇・釈教・地名・人名その他一切の禁忌が解除される。もちろん恋の句も解除になるけれども、あまり、ここで濃厚なものを出すと、まだ漸く破の段のはじまりだから、あとが息切れしてしまうおそれがないでもない。一卷のヤマ場はやはり、次の名残の表六句にもって来る方がよいので、この場所では、あまり、おもしろすぎる句は困るのではなからうか。その点、治定の句は、あまり目立たない句であるが、「芥子きかせてすすり込み」という語勢に、前句の勢にさりげなく応じており、打越の境地からはよく離れているので頂戴した。おそらく海の見える茶店か何かで食べているのだろうが、その場所を明示しないところがよい。

1は心あまりて言葉足らずというか、もうすこし表現を考えられたらよいと思う。2はよく分かり、アイン・ツワイ・ドライという独逸語の数字と近ごろ頓に流行のドライ・ビールをひっかけたおもしろい句だが、ちょっと裏の折立にしてはおもしろすぎるのではなからうか。3ははっ※

句のリゾットと、何か一続きになってしまっておもしろくない。「リッチに決める服選び」だけなら、おもしろかったのに残念であった。16の「金毘羅の石段」も、打越の海岸線と場所の打越である。17はその点、同じ場所でも、大きな外国の地名であるから、場所の打越の難はいささか免れるだろうが、「中国系」も「美少年」もやはり、この場所としてはやや目立すぎるところではなからうか。18は四畳半が何を表現しようとしたのか不明で、その点が気になる。19は007みたいな水上追かけっこシーンが想像される。付味もよく、軽じもきいているが難を言えば、やはりすこしこの場としてはおもしろすぎる。20はさり気ない恋の呼び出しみたいなのがして、よい句だが「て止め」の打越になっているのが惜しい。21はちょっと変わった付けである。前句との付味は非常に遠いが、ホバークラフトとファックスが微妙にひびきあっていておもしろい。22は流石老巧である。さて、次の句であるが、打越のホバークラフトは人情なしの句として考えた方がよいだろう。また、心太は三夏であるから、次は三夏・仲夏・晩夏いずれでもよく、また、夏を一句で捨てて雑の句でもよろしい。

390 松本市筑摩東二四一九番地

【恋句曼陀羅】 定価 三千円 小出きよみ 著

現代恋句の粹を集めた、連句人必読の書。  
 残部僅少。

第二十六回 猫蓑会 歌仙六卷 参加者三十一名

昭和六十三年六月二十日  
於 関口松声閣

青 齒 朶

桜井天留子 捌

青齒朶の重なり揺れて滝の音  
とうすみ蜻蛉透きとほる翅

天留子 元子

切り分けるメロンに児等は手を膝に  
テレビ見ながら居眠りの人

麻子 淑子

素謡の稽古終りて月まろし  
何羽織らんと宵のうそ寒

隆秀 淑

新走りほんのり酔ひて腕の中  
恋の行方を知らぬ十八

元 麻

島はるか瀬戸大橋の架かりたる  
動物園にパンダ生れて

秀 麻

先生と生徒の会話漫画調  
将来思ひきめかねる職

秀 淑

雪時雨市に並べる大根ずし

元 淑

廣 敷

中田あかり 捌

廣敷の木目涼しき黠かな  
四葩一輪活けられし卓

あかり よしえ

囲碁仲間遅参の弁に汗かきて  
オールバックをさつと掻き上げ

利子 彬風

帆船のマストにかかる月の弓  
団栗の実を拾ふ公園

K 弘子

秋拾婆のおはこのたもとくそ  
乞はれてとつぐ嫁の倅せ

利 風

五億円もらへば夫どぶに捨て  
国際便の離陸始まる

K 弘

ネパールの戴冠式に行く僧侶  
からくり時計きける街角

え 風

闇汁の鍋にほのかな月明り

弘 風

夕 水 鶏

中島啓世 捌

夕水鶏鳴くやほのかに匂ふ川  
月待つほどに蛍飛ぶ縁

啓世 徒司

白緋身にゆったりと着こなして  
サイン下さい本の見返し

明雅 千町

行きずりの庭のむく犬お馴染に  
押しくら饅頭集ふ子供等

遊 達子

神楽笛筑波神山燿歌の碑  
しめし合はせてそっとぬけ出し

遊 町

相乗りのしがみ着きたるオートバイ  
夫婦ぜんざいすぐに売切れ

同 司

鬼貫忌伊丹の人と語りけり  
天狗茸やら毒茸も採る

雅 町

いづる間もなく入りゆきし三日の月

遊 町



喜雨の巷

豊田好敏 捌

坂ひとつ下るや松籟喜雨の巷

夏燕入る瓦家の軒

帰省の子畳に鞆ひろげゐて

パウンドケーキたっぷりと焼く

コンサート果てて石階月照らす

ざわめきはるか浸す新涼

ふたりして紅葉みたと旅便り

ペアルックも目紫に

胴巻に厚き札束蚤の市

貰ひ煙草でふっと輪を吹き

流れゆくV字の谿の鐘の音

狐足跡途切れたるまま

下絵師の含む筆先寒の月

人間国宝祝盆に金

イベントはホテルまかせの形通り

うつらうつらとつかのまの夢

親不知経てみちのくの花を見に

春山スキーはしゃぐ若者

イースター籠に盛りたる染卵

夏館

杉江杉亭 捌

城趾の森借景に夏館

胡蝶蘭ある玻璃の水盤

石蹴りで遊ぶ子供の声のして

追へど拂へどじゃれてくる犬

地ならしを終へし空地に月の照り

点呼交して夜業はじまる

みちのくの林檎届きておすそ分け

目と目で合図次の逢引

ドライブをペアルックでびたと決め

カード電話の数字又減り

止めそうでもまだ止められぬ泥沼戦

水煙草吸ふ隊商の列

遥けくも来りしものか寒の月

寝酒たのみに深眠りする

いろはには孫のお習字のびやかに

お大師様の百の石段

伎楽面赤口開く花の宮

草餅の粉膝にこぼして

しゃべん玉吹きながら売る駅の前

夏深き

秋元正江 捌

夏深き大名屋敷学問所

文机に挿す緋き射干

二才児の跣足すくめる砂ならん

犬のしずかに長き耳垂れ

夕月に遅れ帰るかはぐれ鳥

刈上げのころ稿に煩ふ

軸の替菊の字のほか読めぬなり

胸なでおろす嫁の気遣ひ

劇場で会ひても傍に近寄れず

昔OL今ストリップパー

宝くじ幾度買ひても無駄となる

煽ひで消した匂ひ線香

竜の玉こぼるる庭の織き月

雪沓穿きし客を迎へる

ジャイアント勝ちて話をそらされし

野に陽炎のいまだ稚き

花見舟おかめひよっとこ乗り合はせ

盃を重ねる弥生尽にて

西行の詩を説きぬれば風光る



興流連句会 歌仙膝送り

昭和六十三年六月二十八日  
於 興流会談話室

四の宮連句会 歌仙膝送り二卷

昭和六十三年六月二十六日  
於 埼玉県寄居沈流荘京亭

ほととぎす

鮎の腸わた

青梅雨

ほととぎす声高々と山深し

間近に見ゆる白き雪溪

夏炉燃ゆ遠来の友訪れて

書き散らしたる原稿の屑

籠り居も久しくなりし後の月

木の実の時雨屋根たたく音

職人はさすが身軽に松手入れ

法被姿の粋ないでたち

川向ふ住みついてより三代目

恋女房と云はれ鼻下長

キス投げて送りし朝の空は晴れ

残月淡く凍てつける道

落葉敷く発掘現場の出土品

果然

竹無齋

彬風

閑堂

桜丘

草舎

齊

然

堂

風

舍

齊

丘

半生の幸ほのぼのと鮎の腸

児を抱きつつひたる菖蒲湯

青芒つば広帽の行くならん

首をもたげて耳立てる犬

風はらみ帆船集ひぬ月の浦

秋狂言に新調の帯

山葡萄醸す男は手を染めて

カルチェラタンで恋の洗礼

ビリヤード点数ふるもなげやりに

電動椅子のきしむ安宿

爺に聞く系図自慢のきりもなし

裏の畠で土籠叩き来

月明りさすまでラガーランドに

孝子

美奈子

好敏

瑞枝

和子

凡

孝

奈

敏

枝

和

孝

凡

青梅雨の寄居のをとこをみなかな

汗ばむ身体吹ける川風

丹精の鮎の魚田を整へて

お座敷飼の狎が欠伸し

月の出の銀砂の浜の浮き上り

温め酒のお替りをする

菊節会菊の模様の衣まとひ

見て見ぬふりの首筋の痣

逢ふ場所はここときめたるビリヤード

イタリア製のべたんこの靴

飄々と荷風先生袋提げ

枢落とせば迫る夕暮

山の端に月かかゝる毛糸玉

靖子

篤子

杉亭

哲

蓼艸

遊

靖

篤

亭

哲

艸

遊

靖

シルクロードで見たる神様  
駱駝曳くベルシヤ商人鬚赤く  
静かに風の吹ける夕映え  
池の面に咲き誇りたる花ながめ  
浪々暮らし水も温めり

然 丘 風 堂 舍

合コン会費二千円也  
習ひにて骨入れ替ふる七七忌  
カア子と名付け鴉飼はるる  
城跡をながむる亭の花筵  
連句せむとて遅日風狂

奈 敏 枝 三郎 和

終大師に貰ふ切始  
モンストラの婆さま急に幅きかせ  
燃えないゴミは水曜日だよ  
落城の秘史をおほひて花盛る  
蛇は動かず伴天連の墓

恒子 哲 亭 篤 靖 遊 艸

餌をねだる嘴あけて雀の子  
立食パーティ果ててはる酔ひ  
門番と犬が出迎ふ車寄せ  
星占ひもはや用済  
サミットの写真に首相は隅っこで  
記者会見の前の一刻  
腕を組み美男よ美女よと嘶されて  
衣裳と化粧メイク何でも  
パランルも色とりどりのあざやかさ  
西瓜を割れば子供集る  
洛東の伽藍の豊月の影  
古き都の紅葉今ここ

然 風 丘 堂 舍 齊 堂 舍 齊 然 舍 堂 齊 丘 風 然 齊

ふらんこを揺りつつ憶ゆ英単語  
コンピを組んで掏摸の飛来す  
味噌鯨もまじり名物すまんじゅう  
祝詞読みでは僕がやつがれ  
手にあまる乳房の張りをもてあまし  
かくした媚薬減りすぎて咳  
皴もなきツインベッドの片一方  
ロンは最後のサミットを終へ  
雷遠し新聞雑誌重ね置き  
茶碗おもしろと思ふこの頃  
紫の通草を提げて暮敵が  
瀏瀬選ばず月わたりゆく

凡 孝 奈 郎 枝 敏 凡 和 凡 孝 奈 郎 敏 凡 和 凡 孝 奈 郎 敏

子沢山安堵の混る難納め  
ブーニンの弾く雨垂れの曲  
監督のタイムウォッチ大型に  
待ちに待ちたる五輪開催  
到来の金玉糖の藍と紅  
蛸を包む白魚の指  
入り聲でいいといてはみたけれど  
愛に淵あり運に瀬のあり  
癌病棟長き廊下の涯もなく  
供に持たせる果物の籠  
着馴れたる結城の袖月を待つ  
薄穂波を渡る風色

哲 亭 篤 靖 遊 艸 哲 亭 篤 靖 遊 艸

年寄りに見果てぬ夢の秋闈けて  
書を読む室の畳新たに  
軒先きに阿呆鳩のかしがまし  
バッグ担いで急ぐ人々  
散りし花つれなく踏まれゴルフ場  
けふる岬よせる春潮

齊 然 風 堂 舍 齊 然 舍 堂 齊 丘 風 然 齊

糞虫はみみずに鬱をかちつつ  
仲良く老いて面ざしの似る  
精進のこんにやく腹で山寺へ  
名残りに光る雪の白さよ  
花さそふ小町の夢も絢爛と  
しゃぼん玉吹く人波の中

凡 孝 奈 郎 敏 凡 和 凡 孝 奈 郎 敏 凡 和 凡 孝 奈 郎 敏

弓鳴らし少年の射る雁の棹  
ゲームカセット高く積みあげ  
新装の丸善のドア押し開けて  
風船売りの帽子斜めに  
年を経し鎮守の杜の花の冷え  
乗込鮎の便りちらほら

恒 哲 亭 篤 靖 遊 艸 恒 哲 亭 篤 靖 遊 艸

年寄りに見果てぬ夢の秋闈けて  
書を読む室の畳新たに  
軒先きに阿呆鳩のかしがまし  
バッグ担いで急ぐ人々  
散りし花つれなく踏まれゴルフ場  
けふる岬よせる春潮

齊 然 風 堂 舍 齊 然 風 堂 舍 齊 然 風 堂 舍 齊 然 風 堂 舍

糞虫はみみずに鬱をかちつつ  
仲良く老いて面ざしの似る  
精進のこんにやく腹で山寺へ  
名残りに光る雪の白さよ  
花さそふ小町の夢も絢爛と  
しゃぼん玉吹く人波の中

凡 孝 奈 郎 敏 凡 和 凡 孝 奈 郎 敏 凡 和 凡 孝 奈 郎 敏

弓鳴らし少年の射る雁の棹  
ゲームカセット高く積みあげ  
新装の丸善のドア押し開けて  
風船売りの帽子斜めに  
年を経し鎮守の杜の花の冷え  
乗込鮎の便りちらほら

恒 哲 亭 篤 靖 遊 艸 恒 哲 亭 篤 靖 遊 艸

連句懇話会全国大会

昭和六十三年六月十一日  
於 芝増上寺

涼しさの

原田千町 捌

涼しさの自らなり大伽藍  
沢瀉白く咲く心字池  
真黒に子供は皆潮焼けて  
夕飯すめばすぐ眠くなる  
新しき湯殿に月の影招き  
茶立虫鳴く土間の片隅

インディアン銅掘りあてし草もみぢ  
逃亡セスナ恋の二人か  
残されし着物に媚薬一ふくろ  
じっくり鏡見てからのこと  
冬ごもり稿をかかへて書きなづみ  
救急車過ぐ寒月の街  
船津屋は「歌行燈」と癩祭忌

千町 啓世 久美子 房利 定史 明雅  
世 史 雅 世 利 子 世

柏連句会

歌仙二巻

昭和六十三年六月十二日  
於 柏市光ヶ丘近隣センター

椎の花

東 明雅 捌

雲のごと椎咲き香り雨となる  
早苗配りの子ら走る畦  
手作りのアイスクリームでお茶にして  
ソファの上に寝そべりし猫  
潮騒を松原越しの月赤く  
我をめぐりてあきつ飛びかふ

糸瓜忌のもののついでに吉祥寺  
幼な馴染は泣き黒子もち  
しのび逢ふディナーの卓の惚れ葉  
底のわれたるこの人の嘘  
ぞっくりと背筋冷く走るもの  
チェルノブイリに雪の降り積む  
冬の月部屋に嬰兒の匂ひ満ち

千町 冬乃 千雪 明雅 しげと  
と 町 乃 と 町 雪

椎匂ふ

下鉢清子 捌

まてば椎匂ふ虚空に手を伸べん  
ひらひらと舞ふ白き夏蝶  
海酸漿はじめて鳴らす園児にて  
バイエル教本注意書き込む  
蔵造り掠れし看板照らす月  
袖餅子秤って包みくれたる

策弄し暮仇を待つそぞろ寒  
政治からくり古いもあり  
ぴっちりとしみのスカート穿きこなし  
北鎌倉を相乗りの彼  
おもかげの嬰にでんでん太鼓買ふ  
筆頭に貼る冥加金札  
雪兎月の光に溶けゆきぬ

清子 郁子 正江 秋景 庸子  
江 江 景 江 清 江



櫻の芽で酌む本場吟醸

天皇の日はまた花の真盛り

いつまで続く物価安定

斑鳩の朱塗りの棺金の飾

樹下の美人よ今は何処に

吐き出した女が男吐き出して

ぎりぎりともくぜんまいのネジ

鼯鼠が猫のねぐらを占領し

ショパンの生家鳥の茂れる

両巨頭核半減を約束し

快食快眠頭寒足熱

一途なる文の遥かに届けられ

ドレスを買ひて銀婚の人

あれこれと品定めする雨の宵

合羽坂下月を待つころ

秋高くシヤガールの馬ウインクス

そぞろ寒なり道化師となり

納め弥撒まずこの年の懺悔など

痛む腰をば孫にふませる

銀座裏並木通りは鳥の巢

陽炎の中自動車が来る

花吹雪夢幻泡影修羅の舞

昼は蛇とり夜は蛙とり

史

お気の毒様蕎麦屋お休み  
人ごみの埃分けゆく謝肉祭

雅

囀り滑べる地球儀の面

世

しだれさく花の光に酔ひしれて

雅

蛇に刺される風に吹かれる

史

リトマス紙アルカリ青に酸赤に

同

生徒ひとりの過疎の学校

雅

鳩時計鎖を垂れて詰将棋

町

ホンソメワケベラ飼って満足

子

風呂敷に首の如き西瓜なり

雅

俾りながらと高座から嘯家しか

利

教えられいろはにはへとちりぬるを

同

新人類はとくと御存知

子

山葡萄甕いっぱいに密造酒

史

終の棲家の月の光よ

世

天女にも五衰のありてそぞろ寒

史

立つ茶柱に瀾互の喜び

雅

水塊の下に夢みる鯉となり

子

齡重ねて無病息災

同

寸余なる鉛筆よくぞ使はるる

利

団扇を作る人も減りつつ

町

花吹雪太極拳は日に透きて

世

野遊びに行く車びかびか

町

高血圧を防ぐ蕎麦掻

乃

誘ひ合ひゲートボールに齡忘れ

と

ミラノの街にシネマ観る夢

乃

額縁の残裂飾る花ぐもり

と

巢組み仰ぎて電車待つ客

町

週末は一家総出の若布刈

雪

ニューミュージックイヤホンで聞く

と

棲みつきし魍魎魍魎を飼ひ慣らし

乃

秋を待たるる古墳発掘

町

和綴本縮く人に月明かく

と

だから祭りの列のだから

町

古稀過ぎて思ひのたけをまだ言へず

雪

失ふまじくひとすじの恋

同

2Bの鉛筆の芯途切れたる

乃

蠅がアリバイ推理小説

町

豊かさの果にペットの葬儀出し

と

病みつきとなり山めぐる旅

町

唐九郎むらさきの彩碗に焼き

乃

お砂糖の数おいくつですか

と

かけ持ちの家庭教師も終盤に

乃

絹糸弾く音のどけさ

雅

隣人の越して来りぬ花の屋

雪

牛乳壺に育ちゆく蝌蚪

郁

景

清

江

景

庸

景

江

景

郁

郁

庸

郁

清

江

庸

郁

同

江

清

江

郁

清

江

俳諧連歌 歌仙 朴散華

東 明 雅 捌

弔 松濤院殿瓢左法薰日文居士

朴散華忽ち空の寂しさよ

しじまを洩りて落つる滴り

新真綿つやしっとりとし上て

両手で注ぎ淹るるカフエオレ

赤とんぼ学生街の賑かに

暈のふくらむ十六夜の月

野分してわれさすらひのハムレット

かたちあるものみな想ひつげ

惚れ易くあきらめ易く嫁かず後家

聖菓も女も二十五がやま

冬童単線レール続きをり

ちよっとおししゃべり猫と猫語で

お月見の晩とも知らず塾通ひ

親爺が磨く初獵の銃

案山子翁浮世様々見守りて

パーを出す癖グーを出す癖

罰盃のまた廻り来し花の下

ひねもす飽かず雲雀なきるる

芭蕉庵池の蛙は何代目

前座中入りやがて真打ち

夢を売るピエロの哀れ泣き笑ひ

春信美人手招きをする

「ねえあなた命くれれない」「欲しきややる」

五角関係こなす器用さ

ペンタゴン星占ひで動かされ

雪の富士山噴火気がかり

盲腸の傷あと痛む高速路

べったら市に押しつ押されつ

月の中白象に乗る観世音

秋刀魚のけむり懐しく嗅ぐ

原宿の文楽大入袋出し

パーフォマンズも今はすたれる

ジュETT・コスター満たされぬもの振り切って

吾も人の子欲しき生甲斐

金環の輝く古墳ふぶく花

佐保姫の舞ふ野辺の廣々

昭和六十三年六月五日

於 関口芭蕉庵

町秀 恵男 秀 町 恵 町 奈 町 奈 町 秀 久 雅 雅 雅

連句会案内

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時  
会場 関口芭蕉庵  
文京区関口二ノ一ノ三  
(電) 九四一―一四四

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時  
会場 光ヶ丘近隣センター  
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地  
マールケット下車)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時～三時  
会場 新宿住友ビル四十八階  
朝日カルチャーセンター  
(電) 三四四―一九四二(代表)

＊猫養会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)  
会場 松声閣  
文京区新江戸川公園内  
(電) 九四一―九六四九

△御注意▽

柏連句会は、従来第三日曜に興行していましたが、六月から第二日曜に変更致しました。(八月は休み)

雁帛往来

▽五月十八日、京橋区民館で挙行された沙羅の会に出席。

▽五月二十五日、都心連句会の清水瓢左氏急逝。享年九十歳。二十八日七里ヶ浜での葬儀に参列。

▽六月十一日、芝増上寺の第七回連句懇話会全国大会に出席、付方自他伝についてという題で一時間講演。あと実作の会、懇親会にも出席する。

▽七月十六日・十七日、京都に行き、大徳寺孤篷庵・真珠庵を訪ね、折からの祇園会を見る。

▽本号に執筆された方を左に御紹介申し上げる。

▽三好龍肝氏は浄嚴研究所々長。連句は故清水瓢左氏の門下。都心連句会の重鎮で、自ら慈眼舎連句会を主宰、湘南吟社、小布施連句会などに所属される。昭和五十六年には「蕉風連句の道」という著を公けにされ、また共著に「連句研究」(昭和五十四年刊)がある。

▽佐藤廣幸氏については前号で御紹介し

た通り、まことに篤学な方で、古俳諧の註釈に一生涯をひらかれたが、近ごろ、御健康がすぐれぬ由、御自愛を祈る次第である。  
▽この号は歌仙十六巻に対して、二十韻は僅かに二巻で、前号までとは大分趣を異にしている。これは猫養会の面々がほぼ三時間余で、歌仙一巻をこなす実力がついて来た証拠でもあろう。私としては嬉しいのだが、二十韻も切角新しい形式を作ったのだから今後も愛用して欲しいと思う。

季刊「連句」第二十二号

昭和六十三年九月一日発行

編集人 東 明 雅  
発行人

季刊「連句」発行所

▽27 柏市つくしが丘一ノ二ノ二 東方  
電話 〇四七(一七五)一一九二  
振替口座 東京七一五二二三三

印刷所 榎岩田印刷所  
▽27 柏市豊住一ノ一ノ二  
電話 〇四七(一七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共  
一年 二〇〇〇円 送共

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

再版  
B6判  
三五二頁  
三五〇〇円

必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を並び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越

思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字

景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋

鶉沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山

高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二二〇〇円

## 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かした句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円

## 現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円

## 季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモツグ、不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

## 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大二編 A5 八〇〇円

国語慣用句辞典 白石大二編 B6 三〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B6 三〇〇円

日本語語源辞典 堀井令以知編 B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 幸雄編 B6 三〇〇円

隠語辞典 樺垣 実実編 B6 三〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 藤井 宗哲編 B6 三〇〇円

明治新語俗語辞典 榎島忠夫他編 B6 三〇〇円

難訓辞典 中山 善昌編 B6 三〇〇円

名乗辞典 荒木良雄編 B6 二〇〇円

名数数詞辞典 森 隆彦編 B6 四三〇〇円

あいさつ語辞典 奥山益朗編 B6 一〇〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木 兼三編 B6 五八〇〇円

類語辞典 鈴木・広田編 B6 二八〇〇円

類義語辞典 徳川・宮島編 B6 三〇〇円

表現類語辞典 藤原与一他編 B6 一八〇〇円

新版 文章表現辞典 神島・村松編 B6 二九〇〇円

東京堂出版

101 東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2